

東北自動車道の工事状況

なか
中ざわ
澤ゆたか
裕*

東北自動車道は、全線約 684 km のうち、49%にあたる岩槻 I C (インターチェンジ) から泉 I C に至る 335.6 km を現在供用しているが、泉 I C 以北については、早期供用を目指して建設中である。宮城県、岩手県においては、本年度に泉 I C ～古川 I C 間を、52年度に古川 I C ～築館 I C 間および一関 I C ～盛岡南 I C 間の供用を目標に工事を進めているが、そのなかから 2, 3 の箇所状況を報告する。

東北自動車道、平泉工事 (岩手県西磐井郡平泉町地内、延長約 4.5 km) は、昭和49年10月に発注され、51年7月末で約91%の進捗状況である。平泉トンネルは、上下線が分離しているが、延長は共に約 1.1 km である。岩質は、主として固結度の低い細粒砂岩であり、機械掘削を採用して、予定工程を上回る進捗が得られ、トンネル主体部分の工事は終了に近い。

北上工事 (岩手県和賀郡江釣子村上江釣子～同県花巻市中根子、延長約 9.7 km) は、昭和48年11月に発注され、いわゆるオイルショックや49年の不順な天候の影響を受けながらも、51年8月にしゅん功した。一関 I C ～盛岡南 I C 間は、52年度供用開始を目標にしているが、この区間では、すでに舗装工事に着手しており、岩手県内で最も早く高速道路の全容がみられる予定である。盛土材料は、本線西側約 3 km の土取り場から採取運搬したが、土質は、比較的含水比の高い粘性土、粘性土混じり砂レキが主体であり、降雨雪の影響を受けやすく、含水比の低下を計る一方、こね返しによる強度低下の防止に細心の注意を払って施工を行なった。

石鳥谷工事 (岩手県花巻市大畑



写真—1 上下線分離している平泉トンネル北口

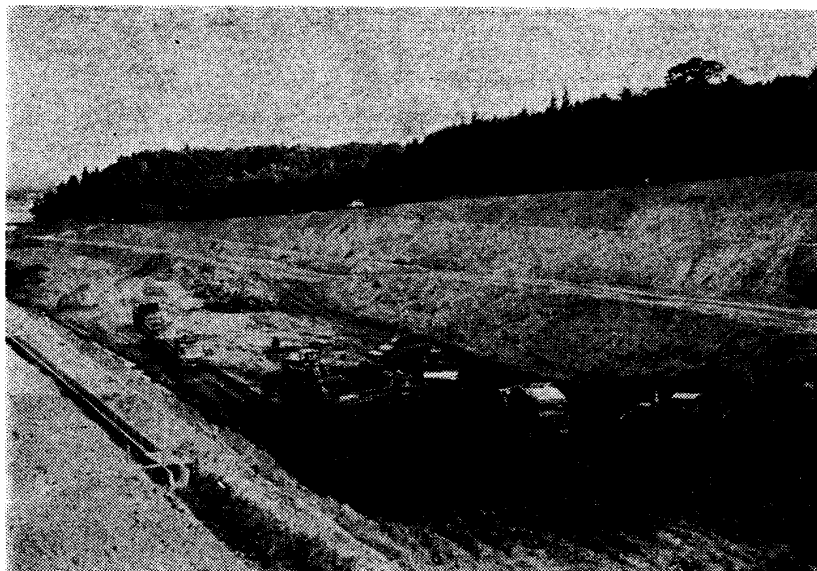
～同県稗貫郡石鳥谷町大瀬川、延長約 6.8 km) は、昭和49年10月に発注され、51年7月末で約74%の進捗状況である。約90万立方メートルの盛土は、約800mの切土区間からの道路掘削の材料で施工されている。切土区間の上部は、風化した粘性土、ロームで覆われているが、下部は、主として



写真—2 姿をあらわした北上インターチェンジ (仮称) 第1 I C はトランペット型、第2 I C はY型、面積約11万㎡、連結道路国道107号バイパス (昭和51年5月撮影)

* 日本道路公団仙台建設局 技術第2課課長

ニュース



写真—3 岩手県内石鳥谷工事現場での切土作業

風化した安山岩質凝灰角レキ岩であり、土工施工基面付近には、かなり大きな転石が点在している。掘削作業にあたっては、東北地方の短い夏期を有効に使って能率を上げる施工計画をたてると共に、浸出する湧水进行处理し、掘削土の含水比を下げることに注意を払っている。

(原稿受理 1976.8.28)

近着の市販雑誌から

○基礎工 1976. 8 (総合土木研究所)

開削工法・根切り工法・山留工法のチェックリスト

高野 孝他 2名

矢板工法のチェックリスト

芳賀 孝成

仮締切工法のチェックリスト

下村嘉平衛

排水工法のチェックリスト

飯田 康幸

○舗装 1976. 8 (建設図書)

静岡県における在来砂利道を利用したセメント安定処理の一例

内田 弘

横浜市における在来砂利道を利用した石灰および

白沢 繁男他 1名

セメント系安定処理の一例

○土木施工 1976. 9 (山海堂)

中央コントロールによるシールドの方向制御について

——都営地下鉄10号線西大島第1工区建設工事——

金子 尚利他 1名

レーザー光線による自動方向修正装置を利用した

鋼製鞘管工法

古屋 衛他 2名

高速道路におけるオーバブリッジ下部工の施工

——東北縦貫自動車道川口～浦和間

竹本 誠雄

○施工技術 1976. 9 (日刊工業新聞社)

特集 建設工事における騒音・振動対策

福井港の防波堤工事

荒木 幸夫

泥水シールドによる名古屋港海底導水トンネルの施工

森平 良忠

○橋梁と基礎 1976. 9 (建設図書)

くい基礎の設計編の改定—道路橋下部構造設計指針

矢作 枢

鋼管グイ頭部の局部座屈に関する実験

嶋 文雄

○土木技術 1976. 9 (土木技術社)

地下ダム構想

榎本 真

濃尾平野の地盤沈下

寺田 斐夫他 1名

軟弱地盤におけるコオンパイル工法

和田 浩

最近の学会活動から

○豪雨時の自然斜面安定に関する研究委員会 (51. 8. 3)

1) 小原村の崩壊に関する資料の検討

2) 崩壊の現地調査について

○山留めの諸測定に関する研究委員会 (51. 8. 25)

1) 現場測定計器と測定例について

2) 配布資料の説明と討議

○超軟弱地盤研究委員会 (51. 8. 26)

1) 講演 (a)「超軟弱地盤の地盤パラメーターについて…補足」

(b)「軟弱粘土の工学的性質に及ぼす微生物の影響」

2) シンポジウムの開催について

新 入 会 員 (51. 8. 1～8.31)

正 会 員

堤 健 治 国鉄高崎鉄道管理局施設部高崎構造物検査センター

安 中 正 実 農林省農業土木試験場造構部造構第一研究室

橋 本 正 志 鋼復建技術コンサルタント調査部調査課

雪 野 光 男 鋼修成建設コンサルタント技術部四課

寺 本 泰 則 北海道開発コンサルタント鋼橋梁部

久 富 弘 巳 日鉄鉱業鋼生産部

松 波 克 次 パシフィックコンサルタンツ鋼水工室河川ダム部

宇 野 浩 彰 西武鉄道鋼建設部

池 上 清 海 旭総合コンサルタント鋼

畠 山 憲二郎 鋼地崎工業土木部試験室

大 西 淳 鋼片平エンジニアリング

天 神 悟 基礎地盤コンサルタント鋼東京事業部技術課